

『苦悩』

——戦争の証言あるいは愛の物語——

佐藤浩子*

La Douleur

Témoignage sur la Guerre et/ou Histoire d'amour

Hiroko SATO

Abstract

La Douleur, "Journal" de Marguerite Duras a été publiée en 1985. Nous trouvons la version originelle de *La Douleur* dans les *Cahiers de la guerre*, rédigés par l'auteure entre 1943 et 1949. Ils sont composés de quatre petits cahiers dont les deux ont été rendus fameux par le préambule où l'auteure évoque, en 1985, les "armoires bleues de Neauphle-le-Château". Elle a dû commencer à écrire ce Journal en 1946, c'est à dire plusieurs mois après le retour de Robert Antelme, arrêté par le Gestapo le 1^{er} juin 1944 et déporté en camp de concentration. Ce Journal décrit le conflit psychique d'une femme qui souhaite le retour de Robert L., et qui, tout en espérant le retour du mari, dans le même temps souffre d'amour pour D (Dionys Mascolo).

Au début Duras a appelé *La Douleur* "La Guerre" qui constitue une des expériences les plus importantes de sa vie. Nous allons donc réfléchir au sens de *La Douleur*: Témoignage sur la guerre ou bien histoire d'amour ?

Key Words: Douleur, guerre, amour, mort, vie

*教授 フランス文学

佐藤 浩子

はじめに

『苦悩』は2008年にパトリス・シェローの演出でフランス各地で上演された。ゲシュタポによって逮捕され強制収容所に送られた夫を占領下のパリで待ち続ける妻の役を演じたのはドミニック・ブランである¹。舞台は日記を語るブランの一人芝居であり、戦争によって振り回される個人とひとりの女の中で変容していく愛の形が、彼女の声、息づかい、あるいは沈黙、彼女の歩みと動作によって描かれ、劇場空間の中に当時の重苦しく緊迫した状況が甦る。芝居は夫から死の影が消え、思わず「お腹がすいた」と一言もらすところで終わる。舞台では生還した夫の肉体的精神的苦しみを内面化していくひとりの女の「苦悩」そのものが浮き彫りにされた。

1995年末、マルグリット・デュラス (Marguerite Duras, 1914-96) の終生の伴侶であったヤン・アンドレア²は、デュラスの命がもはや長くはないと判断し——事実、デュラスは翌年3月3日に亡くなる——彼女の未公開文献のすべてを現代出版資料研究所³に委託する。その未公開文献の中にデュラス自身が「戦争ノート」(“Cahiers de la guerre”)と記して大きな茶封筒に保管していた4冊のノートがある。1943年から1949年までの間、つまり戦中戦後の時期に書かれた『戦争ノート』⁴は、デュラスの生活の根本的な出来事が語られ、作者の生涯における決定的なその時代を想起させるものである。4冊のノートのうち二冊目と三冊目のノートはそのほとんどが『苦悩』(La Douleur, 1985)⁵の草稿であり、この二冊のノートこそがデュラスが『苦悩』の序文で述べている「ノーフル=ル=シャトーの家の青いタンスの中にあった二冊のノート」そのものである。その中にこの日記は見出されたのだが、彼女には「それを書いた記憶がまったくない」⁶。この日記を書いたのは確かにデュラス自身であり、彼女は自分の筆跡や語られている事柄の細部にいたるまでを思い出せるのだが、この日記を書いている自分自身の姿が思い浮かばない。ある時期⁷に一気に書かれた後に書かれたことさえ忘れられたこの日記には、夫ロベール・L⁸の強制収容所からの帰還を願うデュラスの心理的葛藤が記されている。

『苦悩』は発表当時、文学関係者や批評家の間で『愛人』(L'Amant, 1984)に続く自伝ではないかと取沙汰され、デュラスが傷ついたことは事実である。だが作者には当時の生活記録を自伝として発表する意図などまるでなく、むしろ当初、本のタイトルを『戦争』(La Guerre)にすることを考えていた。ナチズムや戦争による多くの死者は国民すべての責任であり、ヨーロッパ全体をまきこんだ戦争とともに自分自身がフランスという国に属していたという普遍性を強調したいと思ったからだ。また出版にあたって「戦争ノート」の草稿に加筆したのではな

『苦悩』

いかという批判にも、作者は「宗教と神に関連しているところを取り除く以外に手を入れることはしなかった」と断言している⁹。確かに『苦悩』は戦争の証言として解釈することができる、だが同時に愛する夫の帰還を待ちわびる妻の、友人 D¹⁰ との間に生まれた愛ゆえに苦しむひとりの女の心理的葛藤の記録でもある。本稿では、『苦悩』が何を意味し、また、その「苦悩」がどのようなものであったかを考察の対象としたい。

1. 希望と絶望の狭間で

『苦悩』は4月とだけ記された日記から始まる¹¹。その後は20日、21日、22日、24日、26日、27日、28日と続き、ロベール・Lの生存を確認した5月以降には日付はない。この間のデュラスの最大の関心事は夫ロベール・Lの消息のみである。「ロベール・L」という名前を果たして見いだせるか、見いだせるとすればそれはどのリストか、ドイツから引き上げてくる捕虜の生存者リストか、あるいは死者のリストか。デュラスと友人Dの必死の努力はすべてそこにかかっている。

では、日記を読んでみよう。

1945年4月、戦争が終盤に近づくとともに強制収容所が次々に解放され始め、捕虜が一人またひとりと戻ってくる中、デュラスのもとには確かな情報が何一つもたらされない。夫の消息は一向に分からず、デュラスは希望と絶望の中で夫の帰還を待ち続ける。彼女は居間の電話の傍に座り玄関のドアを見つめている。

彼はまっすぐ帰ってくるかもしれないし、そうでなければ玄関でブザーを鳴らすだろう、「どなた」、「ほくだよ」。到着するとすぐ仮収容センターから電話をかけてくることもまたありうる、「帰って来たよ、手続きを済ますためにホテル・リュテシア¹²にいるんだ」。
(……) 彼が戻ってこない特別な理由なんかない。戻ってくる理由もない。戻ってくる可能性はある。(11)

3月に入ると連合軍によるライン渡河が報じられ、3月9日はアメリカ軍がレマーゲンに到達した記念すべき日である。アヴランシュのドイツ軍の合流地点が撃破されドイツ軍は退却した。すでにドレスデンは2月に爆撃をうけ街は廃墟と化している。4月16日には赤軍とドイツ軍の戦闘が開始されベルリンの無条件降伏は目前に迫っていた。この戦況からすれば夫が戻ってくる確かな保証はなくても彼の帰還はそれほど異常なことではない。彼女は「戻ってく

るはずのロベール・Lを待っている」のであり、分別をわきまえて夫の帰還を異常なことに仕立て上げないようにしなくてはならない。だがその一方で、デュラスは突然ロベール・Lが死んだという根拠のない確信を抱く。彼女はベルゼン収容所が15日に解放されたことを友人の電話で知り新聞を買って読もうとするが、こめかみが疼き、心臓の動きが一瞬止まる。翌日の新聞には帰還するはずの捕虜のリストが発表されるからだ。外は4月の陽光が燦々と降り注いでいる。彼女はキオスクの前を素通りし仮収容センターにも寄らず、街を歩きながら夫の死んだ姿を思い描く。

溝の中で、顔を地面に突っぶし、脚を曲げ、腕をのばしたまま彼は死にかけている。彼は死んだ。ブッヘンヴァルトの無数の骸骨を通して見える彼の骸骨。(……) 彼が死んで3週間になる。そうなのだ、起こった事態はそれなのだ。私は確信を抱く。(……) 彼は死ぬ前に私のことを思った。(……) 死ぬ直前に、彼は私の名前を呼んだはずだ。(14)

戦況は刻々と変化し、あらゆる戦線で連合軍が前進しドイツに押し寄せている。だが、夫の身に事態が起きたのはその後のことなのだ。彼と同じように何千、何万の死者がドイツの至る所で、道という道に横たわっている。こうして6年間続いた戦争が終わり、ナチス・ドイツは粉碎され彼の人生も終わる。「ロベール・Lとの間にできた子どもは生まれた時に死んでしまった—あの子もまた戦争のため死んだのだ—」(30)。今のデュラスに残されているのは溝の中の夫の屍体だけである。そして突然、彼女はある確信を得る。

(……) 一斉射撃に対する確信、彼は死んだ。死んだのだ。死んだのだ。(……) それは一瞬の出来事だった。(……) もう私の心臓の動きも感じられない。恐怖が洪水のようにゆっくり高まっていき、私は溺れる。私はもう待っていない、それほど怖いのだ。もうおしまいだ、おしまい？ あなたはどこにいるの？ どうやったらわかるの？ 私は彼がどこにいるのか知らない。自分がどこにいるのかも知らない。(……) 私は、この男と私の間に、もう何も共通なものがないことを悟りかけている。別の男を待つ方がました。私はもう存在しない。そうならば、私はもう存在してないのだからロベール・Lを待つ理由はどこにあるのだろうか？(46)

4月22日、デュラスはベルリンが連合軍に占領され戦争に結着がつくことが報じられると、部屋でじっと夫を待つことを決める。そう思いながらもDを訪ねて行くのは、彼の顔に変わ

『苦悩』

た兆しはないか、夫の死を隠している様子はないかを確認めずにはいられないからだ。夜になると、アパートマンの部屋は恐怖で、あらゆることへの恐怖で覆われる。彼女は一瞬外にいるような気になり、天井に目を向けると部屋のすべてが様変わりしているように見える。黄色く光る照明が眼に入った時、デュラスは夫が一斉射撃で死んだことを確信する。彼女の顔は歪み崩れ始め、自分の居場所も、アパートマンの場所も、事の一部始終も何一つ確認できない。彼女は今、何が問題であり、ロベール・Lが一体何者なのかも分からない。もはや二人の間には共通点は何も見出されず、ロベール・Lを待つ理由も必然性も存在しない。彼女は世間の人たちから、いやDからも鋭利な刃物で切り離され奈落の底に転落していくような気になる。

この男と彼女の間には、もう共通なものは何もない。このロベール・Lは何者なのか？ 彼は一度でも存在したのか？ 何がこのロベール・Lを成立させているのか、何なのだ？ 何が彼を、他の人ではなく彼を待たれる身にしているのか？ 本当のところ彼女は何を待っているのか？（……）この部屋では何が起きているのか？ 彼女は何者なのか？ 彼女が何者かはDが知っている。（46）（下線は筆者による）

デュラスの幻想は言いようのない恐怖とともにさらに募り、彼女は次第に錯乱状態に陥っていく。だが、その錯乱状態の中で彼女を現実につなぎとめているのがDの存在である。Dこそが「彼女が何者かを知る」唯一の存在であり、彼女にかろうじて自分自身を取り戻すことを許している。日記はここで一瞬「一人称」（「私」）から「三人称」（「彼女」）へと移行するが、それは一人称で綴られる日記の中で、デュラス自身が陥った「錯乱」を客観的に見つめようとする作家としての意識である。

2. 愛の物語

では、デュラスはなぜ錯乱に陥るほどの恐怖を抱いたのだろうか。彼女の恐怖の背景には一体何があったのだろうか。デュラス、ロベール・アンテルムそしてディオニス・マスコロの三人の関係から考えてみよう。

ドイツ占領下のパリ、サン＝ジェルマン＝デ＝プレのカフェ・ド・フロールでは、ボーヴォワールとサルトルの二人がいつも小さな大理石のテーブルで仕事をしている姿が見られた。ル・フロールの横の通り、サン・ブノワ街の奥にマルグリット・デュラスと夫のロベール・アンテルム、そして彼らの仲間が住んでいたもう一つのアパートマンは、当時、ボーヴォワール

とサルトルとはまた違う奇妙な役割を果たしていた。

デュラスがアンテルムと出会ったのはパリ大学法学部の学生だった1930年代後半の頃である。デュラスはブルジョワ出身のアンテルムの知性、寛大な心や逆説のセンスに溢れた人柄に魅了されるが、何よりも彼といる時の安心感が、当時の時代背景も手伝ったのか彼女を結婚に駆り立てた。結婚を申し込んだのはむしろデュラス自身であり、二人は1939年に結婚する。その頃、彼女は植民地省の情報資料係として働いていたが、しばらくして出版物管理委員会に移る。一方、アンテルムはパリ警視庁の文書補佐係から内務省の文書係の仕事に就いていた。1942年5月、デュラスが彼との最初の子どもを失った頃から二人の関係に変化が現れる。死ぬために生まれてきた子どもへの罪悪感は生涯、彼女から消えることはなかった。この年はサイゴンにいた下の兄、ポールの死も重なりデュラスにとって悲痛な年となったが、その年の秋にガリマール社の原稿審査委員であったディオニス・マスコロと出会う。それはデュラスの一方的な一目惚れであり狂おしいほどの恋であった。彼女はそれまでも常に恋をしていたがアンテルムを裏切ったり、彼の信頼を損ねるようなことはなかった。だがマスコロとの関係は長く続くことを望み、彼の子どもを欲しいと思うようになる。その一方で、彼女に煽られるようにして会ったアンテルムとマスコロではあったが、二人の意気投合ぶりはデュラスを嫉妬させずにはいなかった。彼らは生涯深い友情で結ばれることになる。このようにデュラスはマスコロに恋をしながらもアンテルムを愛し、アンテルムもまた別の女性と関係をもちながらデュラスを愛していた。二人は友情と戦争によるある種の連帯感で結ばれていた。マスコロは二人の住居に毎日のようにやって来たが泊まることはなかった。こうしてデュラス、アンテルム、マスコロは一種の共同体を形成していき、三人の複雑な関係が生まれたのである。

ではここで、再び日記に戻ろう。

デュラスの恐怖の背景にあるもの、それはまさしく夫ロベール・Lの帰還である。夫の帰還は疑いもなく愛する者の帰還なのだが、しかしそれは同時にDへの深まる愛が夫への「非道徳的な裏切り」となって明らかになることでもある。夫はドイツの強制収容所で一切れのパンもなく飢えているかもしれない、あるいは一斉射撃で殺されたかもしれない。それは悲惨で残酷な極限状態を辛うじて生きているかもしれない夫への妻と友人による「裏切り」なのである。

彼が戻ってきても、私は結局死ぬだろう。彼がドアを鳴らすようなことがあったら、「どなた?」「ほくだよ、ロベール・Lだ」、私にできる精一杯のことは、ドアを開け、そして死ぬことだ。彼が戻ってきたら、私たちは海へ行くだろう。(……)海の前にいるあの男は彼だ。ドイツでは夜は寒かった。この海辺では、彼は上着を脱いで歩き、Dとしゃべっ

『苦悩』

ている。彼らは話に夢中になっている。私はそれまでに死んでいるだろう。彼が戻ってきたら私はすぐ死んでしまい、そうなるほかはないのだが、それは誰にも言えないことだ。D もそれは知らない。(36-7)

それでもデュラスは夫の帰還を待ち続けている。だが、彼女はその帰還が怖い。それは、彼女がロベール・L と D への愛のために袋小路に追い詰められているからである。しかも彼女は帰りを待ち望んでいた夫に対して、「D の子どもを欲しい」と切りださなければならない。この状況を打開するには「死」以外にはありえない。夫の帰還、それはデュラスにとって「死」を意味することであり、彼女は「愛」と「死」というダブルバインドの中に閉じ込められていたのである。個人の心情を記す「日記」には「耐えがたい愛」を生きるひとりの女の心理的葛藤が語られているのである。

3. 「強制収容所で死ななかった者」¹³

さて、デュラスが日記を書いていた頃、ロベール・アンテルムはどここの強制収容所にいたのだろうか。ここで簡単に逮捕後の彼の足跡をたどってみよう。

サン・ブノワ街のデュラスとアンテルムの住居は作家や芸術家を始め多くの知識人たちの情報交換と出会いの場であったが、その中にはレジスタンス運動の人たちもいて二人の住居は彼らの隠れ家の役割を果たすようになる。デュラスは出版物管理委員会を辞めレジスタンス運動に情熱を傾けるようになる。一方、アンテルムは内務省で働いていた関係から情報提供に協力し危険な立場に置かれていた。当時、レジスタンス組織 MNPDG (戦争捕虜救出国民運動) を率いていたフランソワ・モラン (=フランソワ・ミッテラン)¹⁴ はデュラスの家に潜み仲間と円座になって自らのレジスタンス運動網に編入させる相談をしていた。デュラス、アンテルムそしてマスコロの三人は彼の組織に入り運動はさらに加熱していく。レジスタンス運動への弾圧が一段と激しくなった 1944 年 6 月 1 日、アンテルムは妹のマリー・ルイズとともに政治犯としてゲシュタポに逮捕される。彼はフレーヌの監獄からコンピエーニュの政治犯刑務所を経て、10 月 1 日にドイツのブーヘンヴァルト強制収容所へ護送される。1945 年 4 月 4 日にカンドルスハイムへ移送され、その後 14 日にピッターフェルトを出発、27 日にダッハウ強制収容所に到着する。つまり彼は 14 日から 27 日までの 13 日間をダッハウへの護送途中の家畜列車の闇の中で過ごしたことになる¹⁵。彼が家畜列車の中にいた 13 日間はちょうどデュラスが日記を書き始めた 4 月 16 日から 28 日までとほぼ同時期であり、しかも彼女には夫がブーヘン

ヴァルトからカンデルスハイムへ移動した知らせは届いていなかった。デュラスはアンテルムの消息を知る由もなかったのである。そして5月にダッハウ強制収容所でアンテルムを最初に発見したのはモルランであり、彼はアンテルム救出作戦の指揮を執ることになる。

5月のある日の朝、デュラスはフランソワ・モルランからの電話で夫の生存を知る。モルランは収容所の解放に立ち会うために公用でダッハウに赴き、死者や瀕死者が放置されている立入禁止地区の小屋で同行のロダンとともに彼を探していた時、死体置場の一角から「フランソワ」と呼びかける声を耳にする。モルランは声の主が誰だか分からなかったが、しばらくして二人はその歯並びからアンテルムだと確認する。彼は人間の想像をはるかに超えるような状態であり、その衰弱からも生還できるかどうかは時間の問題であった。モルランはマスコロとアンテルムのリセ以来の親友ポーシャンに非合法な手段による救出作戦の指示を与える。和平の成立した5月12日、二人は一晩中、車を飛ばし、翌朝ダッハウに到着する。数時間におよぶ探索の後、ある屍体のそばを通った時、彼らはディオニスの名前をかすかに呼ぶ声を確認する。こうしてマスコロとポーシャンに救出されたアンテルムはフランス軍将校の制服に身を包み、ダッハウから800キロの道を車でパリへ向かい、サン・ブノワ街の住居に戻ったのである。

それでは、日記の続きを読んでいこう。

パリへ向かう途中、Dはデュラスの衝撃を少しでも和らげるためにロベール・Lの様子を電話で知らせる。事態はどんな想像をも超えるくらい深刻であり、デュラスは夫の最悪な状態を覚悟しなければならなかった。事実、彼女が夫と再会した時、彼は178センチ、80キロの体重が「骨、皮、肝臓、内臓、脳、肺などすべて全部で37、8キロ」になっていた。凄まじい形相で生還した夫を見てデュラスは叫び声をあげ、その場から逃げ出すほかはなかった。

彼は私を眺め、私だと分かり微笑んだにちがいない。私は、いやだとうめき、見たくないとわめいた。私はそこで引き返し、階段をのぼっていった。私はわめき声をあげていたが、そのことは覚えている。戦争がわめき声となって噴き出ていたのだ。叫び声をあげることのなかった6年。(64)

死者あるいは瀕死者と見なされていた者たちの中から奇蹟的に生還したロベール・Lを前にして、戦争は「わめき声」以外のなものでもなかった。それは「死」以上に恐ろしいもの、「死」以上に悪しきものとなり、いかなるものによっても捕えがたい現実を露呈した。夫を待ち続けたデュラスの「錯乱」以上に残酷な出来事、恐怖の背景にあった予測不可能な出来事が訪れたことになる。だが突然、彼女が夫を認識したのは、その「微笑」である。彼女は「とて

『苦悩』

も遠くから、ちょうどトンネルの奥の方に彼を見ているかのように分かった」(65)のだ。微笑が消えると彼は再び見知らぬ人になる。しかし、この見知らぬ人こそが、ロベール・Lのすべてなのだという事実がそこに存在していたのである。

強制収容所からの生還後もロベール・Lは生死の間を3週間以上さまよい続ける。サン・ブノワ街のアパルトマンに戻ったその日、彼にすぐ食物が与えられたわけではない。収容所から戻った人たちに何かをいきなり食べさせたことによる事故がパリでは何件も起きていたからである。

彼が収容所から帰ってすぐに食べていたら、食物の重みで彼の胃は裂けるか、その重みが心臓を圧迫したことだろう。(……) そう、彼は食べれば、必ず死んでいた。ところがこれ以上食べずにいれば必ず死んでしまう。そこが難しいところであった。(67)

生還した翌日から40度前後の高熱が続き「死」が猛烈な勢いで襲いかかってきたが、ロベール・Lの心臓はかろうじて動いていた。デュラスは医者への指示にしたがって乳児用のお粥をコーヒースプーンに一杯与えると、彼はむせて彼女の腕にすがりベッドに倒れるが、お粥を飲み込む。それでも毎日、彼は食物を欲しがり、日に6、7回ずつに分けてお粥をスプーンに数杯ずつ食べるようになる。それと同時に彼は日に6、7回ずつ「誰も見たことがないような」、「人間のものとは思えない」暗緑色の「便」を17日間排泄し続ける。この異様な便こそが「熱、痩せ衰えた姿、爪のない指、そしてSSから受けた傷跡よりも彼と私たちをへだてていた」(69)事実であった。彼が便を排泄すると部屋中にある匂いが充満する。「それは腐臭とか死臭ではなく、(……)むしろ腐植土、枯葉、きわめて厚い下草の臭いであった。それはまさしく、私たちには決して分からない、彼が抜け出てきたあの深い夜を反映する、暗く深い匂いだった」(69)。そして17日後、この便が止まるとロベール・Lから死の影が消えていく。

ある日熱が下がる。

17日たって死神も息切れしている。(……)

そして、ある朝、いったん熱が彼から出ていく。熱はまた戻ってくるが、また下がる。また戻ってくるが、熱は前より少し低く、さらに下がっていく。そしてある朝彼が言う、「お腹がすいた」。(70-71)

体力が次第に回復してくると彼は肉汁が飲めるようになり、さらに3日たつと固形物が食べ

られるようになる。すると収容所時代の飢餓感が甦り、彼は猛烈な勢いでむさぼるように食べる。妻を見ることもなく、彼女の存在を忘れたかのように食べつくす。ロベール・Lという人間は消え、「底なしの淵のように飲み込む」姿には飢えだけが存在していた。彼女は夫のその姿に慣れることはなかったが、喜びに浸り泣くことがあった。飢餓感との闘いは再び「生きる」ための闘門であった。一方、ロベール・Lが生きるための闘いを続けている間、デュラスもまた同じように闘っていた。彼女は17日間、隣の部屋から夫の食べる様子を眺めているだけで食べることも眠ることもできなかった。眠ると夫が死んだように思えあまりの恐ろしさに飛び起きることもあった。睡眠不足のため頭が朦朧とし家具につかまらなさと歩けない。床が傾斜しているように見え滑りそうになる。肉汁を絞った肉は紙のような味がして喉を通らない。デュラスは夫の肉体的精神的苦しみを内面化していき「痩せて石のように乾いていく」。だが、夫の体力が戻るとともに彼女もまた食事や睡眠がとれるようになった時、「この人は強制収容所で死ななかった」ことを確信したのである。ロベール・Lの生への闘いを記すデュラスの日記は、妻の眼というよりはむしろ冷徹な作家の眼からなされた戦争の証言なのである。

おわりに

アンテルムの健康が回復するまでの一ヶ月、妹マリー・ルイーゼの死は隠されていた。彼女の死が告げられた時、彼は「24歳か」と繰り返すだけで泣くことはなかった。マリー・ルイーゼは盲目になり、凍傷にかかった足をひきずり、末期の肺結核を患い、1945年5月8日の休戦協定の日に亡くなった。その後、彼はドイツでの体験を一冊の本にまとめ『人類』(*L'Espèce humaine*, 1947)を出版する。彼はひとたび本を書き著し、出版してしまうと、ドイツの強制収容所のことやその本のタイトルを二度と口にすることはなかった。デュラスが離婚の話を切りだしたのは、夫の体力がさらに回復してからのことである。生まれてくる子どもの父親のことが離婚の原因ではあったが、彼はあえてそれ以上別れなくてはならない理由を訊かなかったし、彼女も何も言わなかった。もはや、彼女は「苦悩」のうちに燃焼してしまった愛を生きることはできなかった。

『苦悩』は戦争の証言でありながら、実は、夫の帰還を願いながらも友人Dへの「愛」に、そして強制収容所から生還したロベール・Lを支える献身的な「愛」に身を置いたひとりの女の「苦悩」を描いている。この両者への「愛」こそが作者にとって「今もって名づけられず、読み返すとぞっとするような」出来事であり、「生涯でもっとも重要なものの一つ」¹⁶であったのである。

『苦悩』

注

- 1 『苦悩』の初演は2008年11月25日、パリから南西へ20キロのサン=カンタン=アン=イヴリンの劇場。その後、フランス各地の40以上の劇場で上演され、日本では2011年2月から3月に京都、東京、静岡の各地で上演された。
パトリス・シェロー (Patrice Chéreau, 1944-) : フランスを代表する演出家、映画監督。1976年、バイロイト音楽祭で上演したワーグナーの『ニーベルングの指輪』で高い評価を得てその地位を確立。2001年の『密約』でベルリン国際映画祭金熊賞、2003年には『兄との約束』で同銀熊賞を受賞。
ドミニク・ブラン (Dominique Blanc, 1959-) : フランス映画および演劇界で最も重要な女優のひとり。パトリス・シェローとの出会いは1981年のイブセンの『パール・ギュント』、その後2003年の『フェードル』、映画では『王妃マルゴ』に出演。セザール賞を4回、2010年に『苦悩』の演技で2回目のモリエール賞を受賞。
- 2 ヤン・アンドレア (Yann Andréa, 1952-) : 1980年のデュラスとの出会いから亡くなるまでの16年間、彼女と生活を共にする。代表的な作品に『マルグリット・デュラス 閉ざされた扉』(M.D., 1983)、『デュラス、あなたは僕を(本当に)愛していたのですか。』(Cet Amour-là, 1999)、『このように』(Ainsi, 2000)がある。
- 3 Institut Mémoires d'Édition Contemporaine (IMEC) : 文学関係の未公開文献を収集保管するフランス最初の民間の研究所。1988年末にパリ7区に創設、1998年に9区へ移転、2004年9月からカーン市郊外のアルデンス修道院を改築し完全移転。宿泊施設のある研究所として公開している。
- 4 Duras, Marguerite: *Cahiers de la guerre et autres textes*, Edition établie par Sophie Bogaert et Olivier Corpet, P.O.L/Imec, 2006. 全体は「大理石模様のピンク色のノート」(“Cahier rose marbré”, 1943)、「二十世紀のプレスノート」(“Cahier presses du XXe siècle”, 1946-48)、「百ページノート」(“Cahier de cent pages”, 1947)、「ベージュ色のノート」(“Cahier beige”, 1946-49)、および10篇の未発表の「その他のテキスト」から構成されている。本稿で話題にしている二冊のノートとは「二十世紀のプレスノート」と「百ページノート」である。
- 5 1985年発表の『苦悩』には表題作の他に数編の短編が含まれるが、本稿の対象は表題作のみである。
- 6 Duras, Marguerite: *La Douleur*, P.O.L, 1985, préambule. 以下、本書からの引用はすべてこの版を使用し、本文中に頁のみを記す。
- 7 『苦悩』の序文で「ロベール・Lを待っている間にこのテキストを書いたとは考えられない気がする」、また1985年4月17日付の『リベラシオン』でマリアヌ・アルファンに「私の考えでは、『苦悩』を書き始めたのは、私たちが強制収容所体験者のための治療施設に行った時に違いない」(Duras, *Cahiers de la guerre et autres textes*, p.9)とデュラス自身が述べていることから、ロベール・アンテルムが帰還(1945年5月)して数か月後の1946年から1947年にかけてと考えられる。
- 8 日記中のロベール・Lは夫のロベール・アンテルム (Robert Antelme, 1917-90) を指す。
- 9 Entretien avec Marguerite Duras, “Dans les jardins d’Israël il ne faisait jamais nuit”, *Cahiers du Cinéma* 374, Editions de l’Étoile, juillet-août 1985, p.9. *Libération*, 17 avril 1985.
- 10 日記中のDはデュイオニス・マスコロ (Dionys Mascolo, 1916-1997) を指す。
- 11 最初の日記には月だけで日にちはないが、日記の内容からベルゼン収容所が解放された1945年4月15日の翌日、4月16日であると考えられる。
- 12 パリ6区にあるホテルで、当時、帰還した兵士の仮収容センターになっていた。

- 13 『苦悩』の一部である「強制収容所で死ななかつた者」は『戦争ノート』の「ベージュ色のノート」の中に見出される。デュラスは1976年に女性雑誌『ソルシエール（魔女）』（*Sorcières*）に匿名で発表し、その後、『アウトサイド』（*Outside*, 1981）に再録している。
- 14 フランソワ・モルランは1981年から1995年まで二期14年間フランス第五共和政第四代大統領だったフランソワ・ミッテラン（François Mitterrand, 1916-96）の変名。レジスタンス組織の長の一人であったミッテランには、当時の金で25万フランの懸賞金が賭けられていた。
- 15 Cf. Antelme, Robert: *L'Espèce humaine*, Gallimard, 1957.
- 16 Duras, *La Douleur*, préambule.

参考文献

- Adler, Laure: *Marguerite Duras*, Gallimard, 1998.
- Antelme, Robert: *L'Espèce humaine*, Gallimard, 1957.
- Cahiers du Cinéma* 374 Marguerite Duras Eté 85, juillet-août 1985.
- Duras, Marguerite: *La Douleur*, P.O.L., 1985.
- : *Outside*, P.O.L., 1984.
- : *Les yeux verts*, Petite bibliothèque des Cahiers du cinéma, 1996.
- : *Cahiers de la guerre et autres textes*, P.O.L./Imec, 2006.
- Libération*, 17 avril 1985.
- Sorcières* No2, 1976.
- Turine, Jean Marc: *5, rue Saint-Benoît, 3e étage gauche Marguerite Duras*, Métropolis, 2006.
- Vallier, Jean: *C'était Marguerite Duras*, tome 1 1914-1945, Fayard, 2006.
- アンテルム, ロベール, 『人類』, 宇京頼三訳, 未来社, 1993年.
- ダステイエ, エマニュエル, 『パリは解放された』, 井上堯裕編訳, 白水社, 1985年.
- デュラス, マルグリット, 『苦悩』, 田中倫郎訳, 河出書房新社, 1985年.
- 『緑の眼』, 小林康夫訳, 河出書房新社, 1998年.
- 『アウトサイド』, 佐藤和生訳, 晶文社, 1999年.
- 『戦争ノート』, 田中倫郎訳, 河出書房新社, 2008年.
- 小林康夫 「愛, 戦争『苦悩』をめぐって」, 『ユリイカ』, 7, 青土社, 1999年.
- ロットマン, ハーバート・R, 『セース左岸 フランスの作家・芸術家および政治: 人民戦線から冷戦まで』, 天野恒雄訳, みすず書房, 1985年.